

幼小中一貫の教育課程編成プロセスにおける教師の教育観の変容 —附属松本学校園の「くらし」領域のカリキュラム開発を事例として—

中村 祐介 高度教職開発コース

キーワード：学びの連続性，学びの領域，くらし領域，資質・能力

1. はじめに

信州大学教育学部附属幼稚園・小学校・中学校（以下、附属松本学校園）は、平成 28 年度より「学びの総合化」をテーマとした幼小中一貫の教育課程開発研究に着手した。

幼稚園では、遊びの中に学びの萌芽を見出し（遊びの視点），小学校との連続性を保証していく【遊びの学び化】，小学校では，資質・能力を身の回りで活用する力を育成する【学びの教科化】，中学校では，資質・能力を実生活で有機的に活用する力を育成する【教科等の総合化】をキーコンセプトに，幼小中の学びの連続性を教育課程に具現できるよう実践を通してカリキュラム開発研究に取り組んできた。

このうち小学校低学年（1～3 年）段階では，教科間の互惠性をできるだけ断ち切ることなく緩やかに融合していくことを目指し，「ことば」「かがく」「くらし」「ひょうげん」の 4 領域からなる「学びの領域」を設定している。そして，子どもの学びの姿を教科枠にとらわれずに受け止め，そこで育つ資質・能力を深める意識に基づいた授業実践から教科内容の基礎を育成する実践を模索してきた。

こうした学校課題を抱える中，くらし領域部会と幼小接続・連携の主任として，カリキュラム開発に取り組んできたが，戸惑いと試行錯誤の連続でもあった。しかし，カリキュラム開発に取り組み，その新しい枠組みに基づいた授業実践を行う中で，私自身もつ教育観が少しずつ変容し，教師としての大きな学びがあったとも感じている。

そこで本稿では，くらし領域のカリキュラム開発と幼小接続・連携に取り組む中で，教師が何に立ち止まり，どのような葛藤や迷いを抱え，それをどう乗り越え自らの教育観を変容させてきたのか，その足跡を整理し直し，教師としての学びを自覚することを目的として論じていく。

2. カリキュラム開発

2.1 附属松本学校園の子どもたちにみられる資質・能力

幼小中合同教員会（2016.6.14）にて，「附属松本学校園の子どもたちに貫かれている資質・能力は何か」について，全職員で話し合った。そして，それぞれの校園の実践で伝統的に大事にしてきたことや目の前の子どもたちの姿をもとに，「自己表現力」「課題探究力」「社会参画力」の 3 つの資質・能力を見出し，全職員で共有していった。

さらに，幼小中合同教員会（2017.2.6）で，3 つの資質・能力を発揮している附属松本

学校園の子どもたちの姿について、グループに分かれて話し合った。その日の日記に、私は次のように綴っていた。

幼小中の職員で、3つの資質・能力についての子どもたちの姿を語り合った。幼稚園の先生たちとは、公開研究会や教育実習等を一緒にやってきたので話をしたことはあったが、中学校の先生たちと話すのは初めてだった。でも、とても楽しかった。「この姿、中学校でもある」「これが松本三校園の子どもたちのいいところだね」と意気投合する場面もあった。この3つの資質・能力は「三校園に貫かれている」そんなことを感じた。

この時感じた「楽しさ」は一体何だったのか。振り返って考えてみると、「今あるものを見付ける楽しさ」であり、「子どものよさを見付ける楽しさ」であったように思える。子どもをみようとした時、「これが足りない、あれが足りない」と教師が設定する理想の子ども像を前提に足りないものやできないことばかりに目を向けてこなかったか。その減点法の発想から「どのように補うか」という立場で授業をしてこなかったか。教師としての自分の内にいつの間にか構築していた子ども観や授業観を問い直さざるを得ない状況に立たされたのであった。

2.2 3つの資質・能力と具体的な子どもたちの姿

附属松本学校園で共有された3つの資質・能力について、「くらし領域」における実践でイメージする子どもたちの姿を部会で検討し、表1のように整理した。

表1 資質・能力と具体的な姿

自己表現力	課題探究力	社会参画力
身近な人々、社会及び自然を体全体で受け入れ、感じたことや気付いたことについて、言葉や絵、動作、劇化等の方法により自分らしく表現することができる。	自分なりの思いや願いをもって、身近な人々、社会及び自然と関わる中で、自分自身やそれらの特徴やよさ、関わり等に気付くとともに、それらに関連付けながら、よりよい課題解決の方法を考えることができる。	集団の中での自分の役割や行動の仕方に気付き、生活をより豊かにしていくために、友と協働することができる。

この作成過程で、「くらし領域としての自己表現、課題探究、社会参画とは何か」「4つの領域の違いは何か」ということが話題になった。この時の日記に、私は次のように綴っていた。

今日の部会。話題が領域同士の違いに及んだ。私は「対象の違いじゃないか」と述べた。すると、A教諭は「対象への視点なのではないか」、B教諭は「対象への見方・考え方なのではないか」と述べた。最近、こういう話合いがとてつもなく楽しい。私としては紀要を形にしていきたい気持ちもあるのだが、自然とこういう話題になってくる。「領域の可能性は何か」「教師の立ち位置はどこか」など、それぞれの“領域観”とでも言おうか。決して答えが欲しいわけではない。それがぶつかり合うことが楽しい。だから、もっと同僚や幼稚園の先生の声が聴きたくなる。同僚と問い合いながら創り上げていく楽しさを感じ始めている。

今までの部会を振り返った時に、「この文章で伝わるか」というような書類審査をしていたことが多かったように思える。しかし、誰も経験したことのないカリキュラム開発に取り組むことで、方法論的な議論から少しずつ、それぞれの教育観がぶつかり合うような議論が増えていったように思える。この時、同僚と「領域同士の違い」を考え合ったことをきっかけとして、くらし領域から学びの領域へと、私の視野が広がっていったのではないかと振り返る。

2.3 単元構成表の作成

くらし領域は、生活科、社会科、体育科の保健領域に加えて、高学年での分化を想定した家庭科の学習内容をカバーする領域としてスタートし、その単元構成表を仮作成した(表2, 2017.3)。とりあえず表の形にまとめたものの、スコープに既存の教科名を配置していることや内容ベースでの記載になっていること等、検討課題は残されている。資質・能力ベースで領域の単元構成表をどのように表現すべきか、わかりやすく活用しやすいフォームであるためにはどのように修正すべきなのかを、今後も追究していきたい。

表2 単元構成表

幼稚園	小学1年												小学2年												小学3年												小学4年												小学5年												小学6年												中学校1年												中学校2年												中学校3年																																			
	1学期				2学期				3学期				1学期				2学期				3学期				1学期				2学期				3学期				1学期				2学期				3学期																																																																																							
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12																																																																								
活動名	「きせつをたのしもう」 ～まにがっこうさん～												「まらたんけんに行こう!」 ～まにがっこうさん～ 「どうぶつをかおう」 「やさいをそだてよう」												「たんけん!発見!わたしたちのまのひみつ!!」												「けんこうのひけつをさくろう」																																																																																															
教科領域	・後片付けや手洗い ・道具の安全な使い方												・体の成長												・生活リズムと健康 ・食事と健康 ・人の関わりと健康 ・衛生管理と健康												・心と健康												・体の成長																																																																																			
生活科	・水や土の特性 ・水や土に住む生き物 ・アサガオの成長												・氷や雪の特性 ・落ち葉や木の葉 ・自己の成長												・学校周辺の自然 ・草花虫 ・動物の特徵 ・小動物の作り方 ・お世話の仕方 ・病気や支度の仕方 ・出産子育て ・野鳥の特徵 ・卵の作り方 ・種の働き方 ・お世話の仕方 ・取種 ・自己の成長												・川の特徴 ・川に住む生き物												・氷や雪の特性 ・落ち葉や木の葉																																																																																			
社会科	・季節ごとの行事 ・学校で働く先生たち ・通学路の安全												・春の遊び ・伝統文化												・学校周辺の公共施設 ・公共交通機関の乗り方 ・附属幼稚園の子との交流												・春の遊び ・伝統文化												・白地図の表示方法 ・方位や地図記号 ・地形の利用 ・道や交通の様子 ・公共施設 ・地図記号												・町や村の歴史 ・暮らし ・古くから残る建造物																																																																							
家庭科																									・調理の仕方と器具の使い方																																																																																																											

3. 授業実践「ぼくのわたしのふゆじたく-身の回りの自然、友だち-」(2017.11 第1学年)

ある絵本の読み聞かせの実践で、子どもたちは「ぼくたちも冬支度をしたい」という願いをもった。その後子どもたちは、落ち葉でのかまくら作り、洋服作り、食べ物作り、家具作りと活動を展開していった。それらの活動を続けていく中で、C児が「次も、落ち葉で教室を飾りたい」と主張した。私はそれまで、くらしの時間に子どもたちから立ち上がった「ふゆじたく」の活動を行い、ひょうげんの時間に秋の自然物を使って教室の飾り付けの活動を位置付けてきた。C児のその言葉を聞き、「飾り付けはひょうげんの時間にやろうね」と言いかけようとしたがやめた。C児にとっては「ぼくと落ち葉(ふゆじたく)」でしかないのである。教師の都合で、〇〇の時間と定めているが、C児にとってはそんなことは関係ないのであろう。次の時間にC児は、落ち葉で教室の飾り付けを行っていた。そんなC児を見て、周りの子どもたちもひょうげんの時間にやってきた飾り付けを一緒に行っていた。C児の言葉に一瞬戸惑ったのは事実であるが、そこで子どもの側に立つことができた。「〇〇領域ということだけでなく、子どもが対象と向き合った時、そこに生まれる子どもの願いをもとに活動を展開していくことが、くらし領域での学びをゆたかにしていくことなのかもしれない」、そんなことを感じた瞬間であった。

子どもたちは幼稚園で多種多様な遊びを通して、総合的に5領域の内容を身に付けてきたように、「幼児期の子どもにとっての」という視座で子どもの学びをみようとした時、

「領域や教科が先にあるのではなく、子どもが対象に浸り込む姿の中に領域や教科の内容が生まれてくる」と捉える私になっていた。

4. 教職大学院での学びを振り返って

こうして、カリキュラム開発に基づいた授業実践を積み重ねる中で、私の中に起きていた教育観の変化を振り返りつつ、綴った日記をもとにあらためて読み返してみると、私自身が「問うてきたこと」が変わってきたということが見えてきた。初めは「くらし領域とは何か。そして、それをどう形にしていけばよいのだろうか」という問いであった。しかし、今私の内にあるのは「子どもにとっての学びの領域とはどんなものなのか」という問いであるように思える。問いが点から面になった、そんな感覚である。

この問いの変容は、私自身が第1学年の担任と幼小接続・連携を任されたことにも大きく起因すると思う。振り返ってみると、研究開発計画書の理解と教科を融合することから始まった教育課程開発のミッションであった。しかし、授業実践を通して同僚と語り合い、教職大学院のチーム演習や指導教員とのリフレクションを続けてきたことで、問いの変容が見えてきたように思える。そして、この問いの変容が教師の教育観の変容に連動し、それが教師としての学びそのものなのではないかと感じている。

5. おわりに

附属松本小学校研究紀要（2015）に「今、この時この場所で、教師としての私たちは子どもと共に問いを生きている。あらためて本校先達川井清一郎先生の教育思想に出会い直す。」（第1部 p.10）と書かれていた。

「こゝに児童も生き我も生きる 共に本氣な道が開ける」 “子どもの問いに誠実で在れ 対象の問いに本気で在れ 教師自身の問いに正直で在れ そうすれば、子どもと教師の道は自ずと拓かれる”
--

「川井先生が未来へ伝えたかったことはそういうことであろうか。松本小学校に脈々と流れる魂を今編み直していきたい。」（第1部 p.10）と綴った当時の研究主任の言葉に込められた思いに、今まさに私は向き合っている。時代は変わっても、教師を取り巻く環境が変わっても、忘れてはならないものがここにあるのではないかと思う。2年前に初めて読んだ時には私の中に入ってこなかったこのくだりが、今の私には切実に響いてくる。そして、今、ここに立ち還りたくなっている自分がいる。

文 献

・附属松本小学校（2015）．学びを拓く・未来を拓く．研究紀要．第1部 p.10